

竹取物語

昔、おじいさんが、カゴやザルを作るため、竹やぶで竹を取っていました。すると、一本の竹がぼんやりと光り輝いていました。おじいさんは、光る竹を切ってみました。

竹の中には、光り輝く、女の赤ちゃんがいたのです。

「なんとまあ、不思議なことが起こるものじゃ」

驚いたおじいさんは、赤ちゃんを抱え、おばあさんの元に一目散。

子供のいなかったおじいさんとおばあさんは大喜び。

「この子は、天の授かりものに違いない」

赤ちゃんは、不思議なことに、わずか三か月ほどで美しい娘になりました。

「見た目は立派な大人だが、まだ内心は子供のままじゃ」

おじいさんとおばあさんは、娘の内面の未熟さを痛感していました。

そうとは知らず、娘は、不思議な美貌の持ち主であると、評判になりました。また、うっすらと光り輝く様から、「かぐや姫」と呼ばれました。

その不思議な魅力から、多くの若者が結婚の申し出をしましたが、かぐや姫は、ことごとく断りました。

そうして、ついに、かぐや姫の噂は、帝の元にも広がりました。

ダウン症の帝は、かぐや姫に宮廷に来よう求めましたが、かぐや姫は断りました。しかし、帝は、怒ったりすることなく、和歌を交わす仲になりました。

それから三年余り経ったころ、かぐや姫は月を見ては涙を流すようになりました。

心配したおじいさんとおばあさんがかぐや姫に尋ねました。

「どうしてそんなに悲しんでいるんだい」

「もしよかったら話してごらん」

しかし、かぐや姫は光の玉のような涙を流すばかり。

ある夜、かぐや姫はおじいさんとおばあさんに訳を話しました。

「お父様、お母様、実は私、人間ではないのです。あの光り輝く月の者です。次の満月の夜、月からの迎えが来るので、戻らなくてはなりません」

「なんと、それで光っておったのか！」

帝に話すと、帝は、その満月の夜、二千人の家来を集め、お別れの儀を執り行いました。

「かぐや姫は、月にいようと、我が友に変わらない。別れは悲しいが、月を見る度、かぐや姫のことを思い出さだろう。一生分の思い出を得た今、これ以上何を望もうか。元気に暮らせ」

「別れは、怖くありません。今まで、騙していたようで、本当にごめんなさい。私は帰らなければなりません。それに、私は、ダウン症です。帝も同じダウン症ということで、本当に勇気づけられました。帝、本当にありがとうございます。私は、ダウン症ということで、生まれてすぐ、人間界に放たれました。辛くはありません。皆さんに会え、育てられ、立派な大人になりました。これが月流の子育てです。人間界で言うところの、かわいい子には旅をさせよ、ということです。旅は終わりました。お父様、お母様、最後に、これを受け取ってください。不老不死の薬です」

かぐや姫は、不老不死の薬を渡し、月へと戻っていきました。

「わしは、長く生きた。おばあさんにもかぐや姫にも出会えた。もう十分じゃ」

「私も、十分です。かぐや姫とおじいさんと一緒に楽しく暮らせました」

おじいさんとおばあさんは、不老不死の薬を飲むことなく、帝に託しました。

帝は、和歌にその心を読みました。

会うこともできず
こぼれる涙に溺れているようなわが身に
不老不死の薬など何の意味があらうか

帝は、かぐや姫に会えずに長生きをしても意味がないという考えでした。帝は、家来に問いました。

「かぐや姫のいる天に一番近い山はどこだ」

「駿河の山にござります」

「では、その山の頂で、この不老不死の薬を燃やしてほしい」

「しかし、あの山への登頂は並みのことではありません」

「よし、私も行こう。二千人集めよ」

「御意」

家来たち二千人と共に、帝は山の頂で、不老不死の薬を燃やしました。煙は、天高く舞い上がり、月にも達するほどでした。

帝は、溢れ出す涙を抑えることもなく、ずっと泣いていました。

「未来に会おう。君とならもう一度会える気がする」

流れ星が一つ、流れていきました。

了